木の学び舎 - 見て、体験して、交流して -

1. 設計概要

秋田県由利本荘市浦防本部がある東側敷地に「見て、体験して、交流して　木を学ぶ施設」を設計する。木をもっと使おうという国の方針から、由利本荘市民の木に対する意識や知識を培やしてさらなる木の活用を図ゆする。

さらに、カダーレに次ぐ市民が自由に訪れ、寛らぐことの出来る空間となることも目指す。

2. 空間構成

この建物は、大ホール、CLTの間、トラスの間、方杖の間の大きく４つの空間に分けられる。その名の通り、各部屋の柱や梁には CLT、トラス、方杖が用いられている。大ホールには CLTとトラスが用いられており、さらに天井が緩やかに曲がっているので、各部屋とは少し違った空間を楽しむことが出来る。このように各部屋の柱と梁を変えることで、訪れた人々が見ていて飽きない空間を作り出すと同時に、木の利用方法について幅広く知ってもらうと言う意図がある。

また、外にベンチを設けることで誰でも気軽に立ち寄れる場ともなる。

大ホール：市民同士の交流の場、売店

大きな机で学習スペースを設け、木に関連する本も設置する。机には秋田で作られた様々な木（スギ、ブナ、マツ、タモ等）が使われているものとする。色々な人たちと木についてしゃべり、理解を深める場となってほしい。また、売店スペースを設け木にまつわるグッズなどを販売する。大ホール中央には直径８０cm ほどの集成材を用い、この建物の顔となり、その周りに座るスペースを設けることで歩くの人にその温もりを感じてもらう。

CLTの間、トラスの間：体験の場

合板、CLT、LVL、集成材などの断面、重量感、質感などを、またパーティクルボード、チップ、マルタ中央部の余った部分など、一般に捨てられてしまう部分について別の使われ方などを触ったり、実物を見て体験する スペース。

方杖の間：見て、学び、考える場

木材を利用する上で大切になってくる木の循環について学ぶ場。方杖の間の各４つのスペースでそれぞれ違うことについて学ぶ。単に木を使うのではなく、どのようにしてあを、森を循環させていけばいいのか、カーボンニュートラルを実現させていくのかを考えていく場とする。

全面ガラスにし、中の木の利用を見せることでまちを歩く市民の視線を導き、興味を持たせる。

3. コンセプト　一循環一

木材を利用する中で、使う、植える、育てる、伐るという循環が生まれる。この中の全て が揃った時木材の利用が最大限発揮され、どれか一つでもなくなったら循環が消えてしまう。ただ木を使っているのではなく、様々な要因が絡み合って木材の利用が成り立つと言うことを学ぶ場になる。その循環を４つの方杖の間で学ぶことができる。それぞれの部屋で、使う、植える、育てる、伐ることについて現状や、必要性など見て学ぶ。また、その循環を知っていく中で、どのようにしてカーボンニュートラルが実現していくかも学ぶ。そして学びを得つつ、CLTの間、トラスの間で体験を通し、よりイメージを持たせやすくする。一通り学び、体験が終わったら交流スペースで人々と学びを深める。木材についての循環をしると同時に、学び、体験し、深め全という循環も生まれている。

ただ木材が利用されている施設になるのではなくて、実際に学んで、体験して、考える施設となることを目指す。

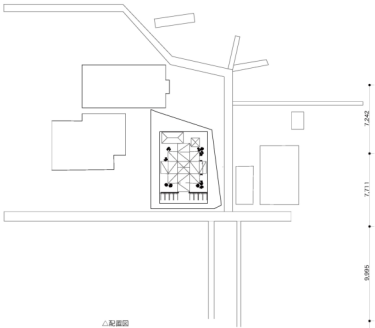
4. 廃材をゼロに

この施設を作る過程ででた廃材から机、椅子、棚などを作る。木を燃やすことは二酸化炭素を排出することである。たとえ廃材を少なくしたとしても、燃やしてしまえば同じである。そこで、丸太をかつらむきにして余る真ん中の部分を机や椅子の足にし、合板を作る中で余った端っこの部分を繋ぎ合わせて板として、机と椅子の座る部分にする。また、材を利用していく中ででた細小な大きさのかけらや、画などを繋ぎ合わせて棚を作る。こうして廃材を限りなくゼロに近くする。

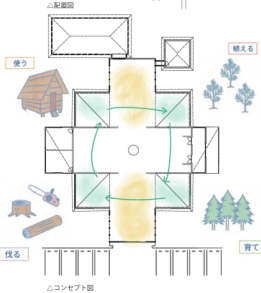
5. 最後に

木を使っていこうという意識はあるものの、実際にイメージが湧きにくいのが現状である。そんな中で必要になっていくのは実際に知り、学び、体験することである。木材製材とはどういった流れで行われるのか、人手はどうなのか、木材をただ使うだけでなく循環させていくためには何が必要なのか、そういったことをもっと学んでいき「木」を私たちの生活の中に溶け込ませていくことがまず必要である。

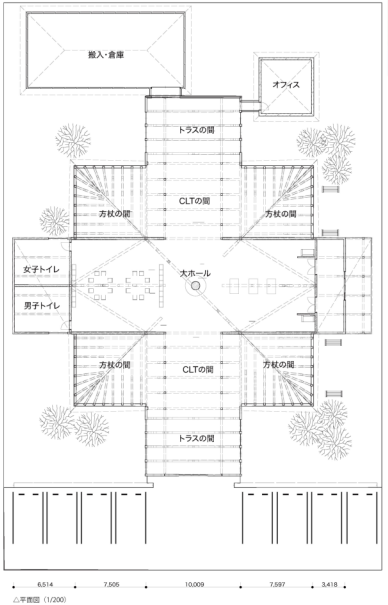
由利本荘市民にとって体験、交流を通して木を学ぶことができる唯一無二の施設になれば良いと考える。



△配置図

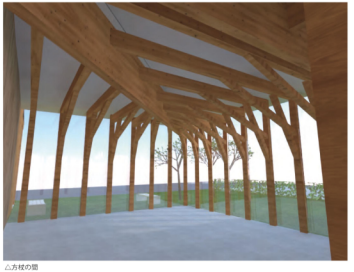


△コンセプト図



△平面図（1/200）

◁CLTの間



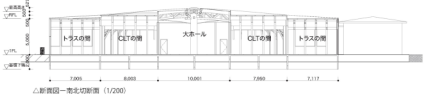
△方杖の間

△大ホール共用スペース

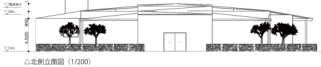
△大ホール売店側

◁トラスの間

△断面図ー東西切断面（1/200）



△断面図ー南北切断面（1/200）



△北側立面図（1/200）

△東側立面図（1/200）